

東洋医学の観方

高松 文三

大インフルエンザ

今から百年前、一九一四年の一大事件といえば、第一次世界大戦であるのは周知のことだが、それから四年後に起こった出来事については忘れ去られている感がある。全世界を巻き込み、その被害者（死者）数たるや大戦のそれをはるかに上回り、五千万人から、一説には一億人に及ぶと言われている。いわゆる「スペイン風邪」である。その規模は史上最大といつていい。実際に始まったのはアメリカ、カンザス州のハスケル郡という説が有力である。当初まだ大戦中、各国情報統制があり、中立国であったスペインではその必要がなく、いち早くインフルエンザの流行をニュースにしたために「スペイン風邪」と呼ばれるようになった。これによる一年間の犠牲者数は中世における黒死病（ペスト）の百年間に亘る犠牲者数を超えるというからその規模が想像できる。例えば、一九一八年十月の一カ月の間に、フランスのパリでは、四五四人が犠牲となつてゐる。同月十日の一日の間に、フィラデルフィアでは、このインフルエンザによる死亡者が七五九人に及んだ。周りで人がバタバタと死んでいくという表現が大きさでも何でもない状況であつた。しかも、死ぬのは老人や子供だけでなく、二十代、三十代の若い人たちなのである。日本でも約一年の間に三十万人から四十万人が亡くなつてゐる。大戦を終わらせた一因にもなつてゐる。この大インフルエンザの猛威に敢然と立ち向かつた科学者達の物語「The Great Influenza」by John M. Barry「J・M・バリー、良くも悪くもこのインフルエンザの研究は、その後のアメリカの医療のあり方を決定付けたと言つてよい。

まず驚くのは、一九〇〇年近くまでは、アメリカにはまともな医科大学が無かつたことだ。学費さえ払えば、ほぼ誰でも入れた。高卒の資格さえなくても入れたのだ。普通の大学に入るほうが困難だつ

たのである。当時の医学の最先端を走つてゐたのはドイツやフランスであり、真摯に医学を志す者は多くそれらの国へ留学した。日本もアメリカと似たような状況にあり、北里柴三郎などはその代表的な一人である。当時において、北里は突出してゐて、当時彼を上回る医学者はアメリカにはいなかったと言つてよい。アメリカは医学においてはまだ後進国だったのである。ジョン・ホプキンス医科大学の設立（一八九三年）あたりからアメリカ医学は急速に進歩し始める。この物語はアメリカ医学史でもある。それから、三十年を経ずして、ジョン・ホプキンス医科大学も、それと密接な関係にあつたロックフェラー・インスティテュートも医学研究機関としては世界でトップクラスになる。

インフルエンザの研究による副産物は数知れないが、その大きなものの一つはアレキサンダー・フレミングの抗生物質の発見である。ただ彼自身はあくまでも細菌培養の過程で偶然ペニシリンを発見しただけであつて、それを薬として使うアイデアはなかつたらしい。ほかにオズワルド・アベリーによる「DNA が遺伝因子である」という発見もある。しかしこの辺りから医療は「病人を治す」よりも「病気を治す」という傾向が強くなる。特定の病原菌が特定の病気を引き起こすという考え「Germ Theory」（微生物病原説）から、医療従事者のエネルギーは、病原菌の発見から、それに効く薬や、予防接種の生成などに注がれるようになる。医療がどんどん「Impersonal」になつていったのは当然の成り行きである。患者さん個人の身体を診るのではなくテスト結果というデータを見て治療を決めるというやり方はこの頃に芽生えた。ちなみにこの物語の後半に野口英世が登場するのが興味深い。彼は、インフルエンザの研究には直接貢献はしていないが、アメリカ医学の創成記にその渦中にあるロックフェラー・インスティテュートにいた。研究所初代ディレクターのサイモン・フレクスナーを頼つて渡米したわけである。彼の業績の評価は定まらないが、これを読む限りわりと周囲には愛されたりしい。

現在でも、インフルエンザの死亡者は毎年三万人を超えらるという。先頃ずいぶん取り沙汰されたエボラでさえも、約一

年で数千人の死亡者を出しているというから、どちらかと言えばむしろインフルエンザの方が、脅威である。確かに、エボラの方が一度罹つた場合の致死率は高い（五〇％以上）が、罹患率は麻疹（はいしか）よりも低く、なりよりもインフルエンザのように空気感染はしないので、その点は安心である。二十年前のベストセラー「Hot Zone」by Richard Preston はエボラの恐ろしさを世に知らしめたが、この本にはだいが不正確なところがあるという。確かにフィクションを読むような感覚で読めるが、脚色が多いようだ。はっきり言つて余り参考にはならなかつた。ただ、エイズにせよ、エボラにせよ、アフリカに生息する猿などを使う動物実験が、流行病の蔓延の一因になつてゐることを示唆しているところは注目に値する。

ともかくにも、ヒポクラテスの時代からほぼ二千年間ほとんど変化がなかつた西洋医学が、ここ百年余りに見せた劇的な進歩は目を見張るものがある。それは、科学の進歩と表裏一体となつてゐる。ただ科学であるためには再現性が必要条件だが、その意味で、医学は未来永劫科学にはなり得ないことをわれわれは認識すべきである。医学が人間を対象とする限り、個性を無視しては成り立たない。いかに罹患率の高い流行病であろうとも、一〇〇％ということはありません。同じような条件でも、罹る人と罹らない人がいる。一八九二年、コッホと並んで日本の医学界にただならぬ影響を与えたペッテンコーファーが、コッホとの論争にけりをつけるためにコッホが培養した多量のコレラ菌を飲んだ。コッホはコレラ菌こそがコレラの病因であることを主張する一方、ペッテンコーファーはコレラの原因はもっともつと複合的なものと主張した。事実コレラ菌を多量摂取したペッテンコーファーはコレラに罹らなかつた。これをもつてペッテンコーファーは、コッホが提唱する「Germ Theory」に異を唱えたはずだが、近代医学の大きな流れには逆らえなかつた。ここで学ぶべきは、医学には再現性がない、つまり科学にはなり得ないということだ。科学の世界は一足す一は必ず二の世界だが、人間というのは、一足す一が三になつたり、ゼロになつたりする世界なのだ。西洋医学の最大の武器は科学技術であるのは論を俟たないが、その最大盲点は医学は科学であるという妄想に他ならない。そして、大インフルエンザから百年経つた今も、まだ我々はその妄想から覚めていない。